

河瀬虎三郎（偉風堂）の蔵刀把握とその性格について

井本悠紀*

The collection of Torasaburo Kawase(Ifudo) and its characteristics

Yuki IMOTO*

はじめに

美術工芸品は伝世過程でモノと共に旧蔵者に関する情報を伝え残していくことが多々ある。これを伝来という。伝来は有名武将、大名、公家や名家、著名人などを中心にモノとの関わりを記録・記憶していくものである。伝来が守り続けられることによって、モノが歩んだ歴史が記録され続け、モノに多様な価値を付加していくことになる。また伝来によって旧蔵者の嗜好性や人物交流、社会的要求などを明らかにすることを可能にする。しかしながら、一般的に歴史的偉人ではない人物の旧蔵記憶は、時間の経過と共に記録が埋もれ、または関心が薄れることによって情報が不明になることが少なくない。それは時間の経過に比例し失われていく危険性をもっている。そのため、旧蔵者に関する情報は資料に基づいた実証的研究によって確実に残していく

作業が必要であると、筆者は考えている。特に近年は、世代交代によるモノの動きが著しく、とりわけ次代のモノの継承への障害（モノへの関心の低下、相続に伴う税金）などによってモノの散逸が進んでいく可能性が高く、伝来情報の安定化作業が一層求められるものと思っている。

本稿は大正・昭和の刀剣蒐集家として随一と評された、河瀬虎三郎（偉風堂）の旧蔵刀の全容と性格を明らかにしようとするものである。河瀬が蒐集した刀剣類は数百点にのぼったが、昭和一八（一九四三）年以前に殆どの蔵品を売却し、ほぼ全てが散逸することになった。一時代を築いた河瀬であったが、時代の流れと共に河瀬を知る人間は減少傾向にあり、河瀬が関わったモノの歴史が時間と共に埋もれようとしている。そのため、河瀬に関わる伝来情報（この伝来は河瀬以前で

*駒沢女子大学 非常勤講師

はなく、河瀬自身のことである）を安定化させるため、河瀬が作成した『偉風堂聚藏押形』(古刀編・新刀編)と『偉風堂藏刀控』を根幹資料に据えて、河瀬旧藏刀の全容を把握していくことを本論の主旨とする。また考察の対象は、河瀬旧藏品中の刀剣に焦点を絞って藏刀の特徴を明らかにしようとするものである。

一章 河瀬虎三郎(偉風堂)について

河瀬虎三郎は明治二一(一八八八)年、徳島県徳島市籠屋町の松浦家に生まれ、同四三(一九一〇)年に大阪府で織維商を営む河瀬家の娘婿となる。河瀬は、古美術にたいする鋭い鑑識眼をもつ目利き者として知られ、武器・武具、仏教美術、茶道具など数多くの名品を収集した。昭和一八年、兵庫県から奈良県奈良市多門町に移り、聖武天皇陵を背にした多聞山麓で自邸^二と茶室(栄西堂)を構え、本格的に茶人としての道に進む。河瀬を茶の世界に導いたのは益田鈍翁や原三溪など大数寄者に仏教美術を納めていた第一級の道具屋、酔古堂の柳生彦藏であった。柳生に感化された河瀬は茶の世界に没入し、多くの茶人と交わり「奈良茶人」の代表的人物として存在し、昭和四六(一九七二)年に享年八二歳で亡くなった。

河瀬にはいくつかの号が存在し、昭和一八年以降の茶人時代に「無窮亭」を使用し、それ以前に「偉風堂」、他に「春陽軒^三」や「寸松庵」と称した。無窮亭の時代に、電力の鬼こと財界茶人松永安左エ門(耳庵)に半ば強引に奪われた古唐津(老鶴^四)と柿の帯(安見子)の交換は、茶人河瀬を語る上で伝説的な逸話として存在し、無窮亭の名を

有名にしている。その一方で、偉風堂の名で河瀬が語られることは少なくなっている。

偉風堂の号は昭和一八年以前、刀剣類の収集に邁進していた時代に使用していた号である。河瀬の古美術・工芸の収集は、武器・武具類の分野から始まった。とくに刀剣の収集に力を注ぎ、後に「刀で鍛えあげた目があれば他の美術工芸品がわかるようになるのに苦労がいらぬ^五」と述べるほど、刀剣鑑定^六の道を極め当代随一の目利きと評された。刀剣の収集は大正一〇(一九二一)年前後^六から本格的に始め、昭和一〇年代まで続けている。その間、売却や譲渡などで出入りがあるものの数百点の藏品があった。この旧藏品には、後に国指定・認定^七を受けた名品が多く含まれ、河瀬の高い鑑識力が示されている。大正・昭和の刀剣蒐集家を評して、東の山本悌二郎^八と西の河瀬虎三郎(偉風堂)が東西横綱として比較されるなど、偉風堂の名は刀剣数寄者の間で名高いものであった。

しかしながら、昭和一六、七(一九四一、一九四二)年頃までには殆どの刀剣類を売却し、奈良の地で茶人無窮亭として後半生を生きていくことは、先に述べた通りである。偉風堂が、何を思つて刀剣蒐集から身を引いたのかは伝えるものがない。ただ、その後も刀剣との関わりを断絶することはなく、昭和二〇(一九四五)年代から国宝・重要文化財指定の諮問機関である文化財専門審議会で「刀剣審査委員」を一六年間ほど務めている^九。また『奈良市史(工芸編^{一〇})』に「奈良の刀鍛冶」を執筆するなど、生涯にわたって「刀剣の研究に努め刀剣界に貢献^二」したことが評価され、昭和四二(一九六七)年に勲四

等瑞宝章を授受している^二。

これらの経歴が示すように、河瀬という人物評をする時に偉風堂時代を論じない訳にはいかないのである。ただ従来の研究では、「偉風堂好み」が反映された旧蔵刀品の全容を論じる研究がされてこなかった。河瀬と対比された山本の旧蔵品の一部は三井記念文庫に納まり、山本の趣向を読み取ることができるとはなかつた。大正一五（一九二六）年から数回に分けて売立を行なったことも蔵品の散逸を促し、蔵刀の体系的把握をしづらくさせた要因であろう。昭和四六年、追悼「偉風堂旧蔵刀展」が開催^三され、刀剣愛好家に河瀬の旧蔵品が紹介された。

表一 偉風堂展観目録

1	重要文化財 太刀銘	久国	刀剣協会管理
2	国宝 短刀銘	来国俊	大阪 太田喜一氏蔵
3	重要刀剣 太刀銘	来国次	愛知 山下弘氏蔵
4	重要美術品 刀 無銘	伝了戒	静岡 塩谷影彦氏蔵
5	重要文化財 脇指 無銘	信国	刀剣協会管理
6	重要刀剣 短刀銘	藤原貞興	愛知 神藤正道氏蔵
7	重要美術品 脇指銘	相模国住人広光 延文二年七月日 附拵	静岡 佐野美術館蔵
8	重要刀剣 刀 銘	村正	香川 津島惣平氏蔵
9	薙刀銘	濃州赤坂住兼元 享禄元年八月日	兵庫 中迫陽治氏蔵
10	重要文化財 刀 朱銘	義弘 本阿(花押)(名物松井江)	静岡 佐野美術館蔵

展覧会への出品数は五〇点(内一点は刀装具)で国宝二点、重要文化財一四点、重要美術品一〇点の名品が並んだ(表一^四)。この内、四〇点は『偉風堂蔵刀控』に記載されるが、出品番号九、二三、二六、二九、三一、三四、三五、三六、四三、五〇(刀装具)の一〇点は『偉風堂聚蔵押形(古刀編・新刀編)』と『偉風堂蔵刀控』には確認ができない。この展覧会の出品作は、偉風堂旧蔵品の中でも随一の名品を集めたもので、蔵刀を代表するものとして語られているが、その全容を把握するまでには至らないのである。そのため、河瀬が残した資料を活用し、改めて偉風堂蔵刀を把握したいと考えるものである。

11	重要刀剣 短刀銘	宇多国久	静岡 佐藤寛次氏蔵
12	重要美術品 短刀銘	宇多国房	富山 大沢安三氏蔵
13	重要文化財 短刀銘	賀州住真景 貞治六年月日	神奈川 中村正衛氏蔵
14	重要文化財 太刀銘	一助成 附獅子王太刀拵	東京 高橋シズ子氏蔵
15	重要美術品 太刀銘	一(伝景安)	石川 大友佐一氏蔵
16	国宝 太刀銘	助真	大阪 畑島庄宗氏蔵
17	刀 無銘	真守	長野 江原正一郎氏蔵
18	重要文化財 太刀銘	備前国長船住左近将監長 光造 正応二年十月日	岡山 岡山美術館蔵
19	重要文化財 短刀銘	景光	兵庫 大槻孝治氏蔵
20	重要刀剣 刀 銘	金象嵌 真長	神奈川 角替利策氏蔵

21	重要文化財 太刀 銘	備前国長船兼光 延文元年十二月日	山形	蟹仙洞藏
22	重要刀劍 短刀 銘	備前長船住長義 貞治二年乙巳二月日	東京	阿部勝治氏藏
23	刀 無銘	元重 伊勢天照大神八幡大菩薩 天滿大自在天神 備前長船盛光 応永卅二年二月日	兵庫	藤高六助氏藏
24	太刀 銘	備前国長船住左衛門尉藤原朝臣則光 於作州鷹取庄黒坂造 鷹取勘解由左衛門尉菅原福岡朝臣泰佐打ス之 長祿參年己卯十二月十三日	東京	桜井啓司氏藏
25	重要文化財 刀 銘	備前国住長船勝光宗光 備中於草壁作 文明十八年拾二月十三日	東京	高橋常弘氏藏
26	刀 銘	備前国住長船賀光 けん志ゆ坊 寛正五年二月日	大阪	勝田種一氏藏
27	重要美術品 刀 銘	備前国住長船忠光 於作州院庄為丹治則久作之 永正元年八月吉日 及心処不可有上者也	大阪	吉井忠直氏藏
28	刀 銘	備前国住長船与三左衛門尉祐定 為栗山与九郎作之 永正十八年二月吉日	岡山	岡野多郎松氏藏
29	重要文化財 刀 銘	備前国長船修理介勝光 享祿二年八月日	埼玉	小川盛弘氏藏
30	短刀 銘	吉次 附拵	愛知	岡島千代氏藏
31	短刀 銘			

32	重要刀劍 刀 無銘	安綱	愛知	岡島千代氏藏
33	重要刀劍 刀 無銘	左(名物大西左文字)	東京	山崎みゆき氏藏
34	重要文化財 短刀 銘	筑州住 附拵	福岡	二宮秀夫氏藏
35	重要美術品 短刀 無銘	伝左 附拵	大阪	永藤一氏藏
36	重要美術品 短刀 銘	豊州高田庄藤原友行作 貞治六年八月日		刀劍協会管理
37	重要美術品 太刀 銘	国時 附拵		刀劍協会管理
38	短刀 銘	出羽大掾国路	兵庫	稲田慶二氏藏
39	脇指 銘	河内守国助	兵庫	稲田慶二氏藏
40	脇指 銘	長幸於撰津国作之	兵庫	難波三郎氏藏
41	重要美術品 刀 銘	津田越前守助広 天和元年十二月日		刀劍協会管理
42	重要文化財 刀 銘	江戶越前康繼 (葵紋)以南蛮鉄於武州 慶長十九年八月吉日		刀劍協会管理
43	脇指 銘	江戶越前康繼 (葵紋)以南蛮鉄於武州 本多飛騨守成重所持内	兵庫	稲田慶二氏藏
44	重要美術品 脇指 銘	肥後大掾貞国	兵庫	稲田慶二氏藏
45	重要文化財 刀 銘	長曾祢興里入道席徹 同作彫之長曾祢興里虎徹 入道 (金象嵌) 寛文元年霜月 廿五日	香川	津島惣平氏藏
46	重要刀劍 脇指 銘	脇毛式ツ胴度々三ツ胴藏 断 山野加右衛門六十四才永 久(花押)	香川	津島惣平氏藏

47	重要刀剣	脇指 銘	羽掃為都筑久太夫氏勝作 之 元和八年戊八月吉日 大和州住人九郎三郎重国 居駿河州後於 紀伊州明光山作之 (棟に) 鑿物天下一池田 権助義照	香川	津島惣平氏藏
48	重要刀剣	刀 銘	肥前国忠吉	東京	立浪日郎氏藏
49		短刀 銘	肥前国忠吉 勃物宗長	愛知	丸山忠吉氏藏
50	重要文化財	花雲形七宝鐔 (伝平田道仁)		大阪	吉井忠直氏藏

二章 「偉風堂資料」について

河瀬の蔵品を明らかにする一級資料に『偉風堂聚蔵押形』(以下、『聚蔵押形』とする) 古刀編・新刀編の二冊がある。これは、河瀬が刀剣数寄者として深い交流をもった刀剣研究者、本間順治(薫山)に贈ったものになる。古刀編の奥書に、「以上新古刀押形集ハ後日の参考手控のため/作製に参考とせしもの総て不備達成のものなり/昭和三十三年十一月二十三日、誕生ノ日/偉風堂老人/八十一」とある。河瀬は昭和四五(一九七〇)年から療病生活に入り、翌年正月四日に亡くなる。晩年に際して、自らの生涯をかけて向き合った刀剣の蔵品記録を本間に託したのである。また、この二冊に『偉風堂蔵刀控』(以下、『蔵刀控』とする)と『偉風堂押形』の二冊を加えた全四冊(以下、『偉風堂資料』とする)が本間に渡されている。本間は、この偉風堂資料を個人所有とはせず、当時館長を務めていた刀剣博物館^五に寄贈して館の蔵書として管理されている。ただ惜しいことに偉風堂資料を調査し

て、河瀬の蔵刀に関する研究はされてこなかった。

そのため、ここでは偉風堂資料の性格を概観していく。『聚蔵押形』は、先述の通り本間に渡されたものである。古刀編と新刀編^六の二冊に分けられるもので、古刀編八六点、新刀編一〇三点の押形が貼り付けられ、墨書による説明が付されている。古刀編・新刀編共に一丁表(以下、丁の表・裏を「オ・ウ」と記す)の左下隅に「偉風堂珍藏」の長角印、中央上部に「財団法人日本美術刀剣保存協会」の印二種が押される。また古刀編五三丁ウ、新刀編五三丁オにも「偉風堂」の角印が押されている。『聚蔵押形』の全体構成をみると、作品に関して時代・国による分類整理を行なった形跡は確認できない。これは自身の手控えとして作成した雑多な資料であったことを示唆している。各押形については採拓時期を定める情報は少なく、わずかに古刀編の二丁ウに「昭和三年拾月拾三日求む」と購入時期、また同一〇丁オに「昭和三年正月六日記」、同五丁オに「昭和三年六月拾九日写」と採拓日が記される。これらから判断して、『聚蔵押形』は昭和三(一九二八)年前後から作成し始めた冊子の可能性が考えられる^七。また作品によって昭和一二年(一九三七)から一四(一九三九)年^八の追記を確認することができる。また古刀編・新刀編共に押形が終わった次の丁に墨書による「追加の部」がある。

追加の部 『古刀』(五三丁から五五丁ウ)

昭和十年頃松谷豊次郎氏を介して犬山成瀬家より左記入手押形無之一粟田口吉光 脇差 在銘 光山所載

一尺九寸位

一左 在銘短刀 本阿弥光室三十枚

一左 在銘短刀 〃 六十枚

一因州景長 金□□鮫鞘拵付之

一無銘陣太刀 朱地藤花鞘拵付

其他數十刀押形未成

追加明細書紛失スル

栗田口久国 刀在銘 秋本家伝来

来国次 刀〃 柳沢家〃

若狭冬広 刀在銘 今村長賀伝来

相州広光 短刀在銘 光山押形所載

備後国一乘 〃 応永裏年号

当麻有俊 刀無銘 本阿弥光室折紙添

豊後国行平 刀在銘 蜂須賀家伝来

備前国長元 刀在銘 正和年号

備前国助真 刀無銘 光忠折紙

松井郷 刀無銘 南紀徳川家伝来

備前吉岡一文字 刀 在銘

栗田口吉光 短刀 無銘

千手院義弘 〃 〃

備前国長船祐定 〃 在銘 天正年号

相州康春 〃 在銘 表裏枝梅之彫

備前国長船勘解由左衛門尉刀 堀部直臣翁旧蔵

所持銘年号在

備前国助真 刀 在銘 紀州徳川家伝来

備前国長船忠光 長銘刀 心及所其上知不可有也云々

細川利文氏より参る

相州行光 刀 無銘 本阿弥光温折紙洪谷内膳

家康より軍功にて排領

備前国義光 短刀 元亨裏年号

来国俊 長刀

筑前実阿 刀大磨上古折紙添 水戸家大小拵鐔毛彫波

長谷部宗信 在銘 脇差 後藤一乘金色絵鶴目貫

村正 刀 在銘 大小拵

信国 脇差在銘 金三番叟目貫

沈金彫 錫太刀金物鞘沈金彫獅子牡丹

追加の部 『新刀』(五十四丁才から五十四丁ウ)

一武蔵大掾藤原忠広 短刀 大道寺家伝来

埋忠明寿彫

一堀川国広 毘沙門天ノ彫 天正十七年

一長曾祢興里入道席徹 刀

一長曾祢興正 脇差

一肥後大掾藤原貞国 短刀 切刃造 表櫃内俱利伽羅

裏梅ノ立木

一播磨守照広 短刀 切刃造

一月山貞一 短刀

一逸見義隆 短刀

古刀編追加の部に、昭和一〇（一九三五）年頃に入手した作品は押形未作成とあることからすれば、この頃には採拓を終えていた可能性がある。これらのことから『聚藏押形』は、昭和三年前後から一〇年までに集積した押形が基本となった資料と推論される。

『聚藏押形』に所載する蔵刀数は、追加の部を加えると古刀編一一六^九点、新刀編一一一点となり、総数二二七点になる。

次に『蔵刀控』をみてゆきたい。本書は一丁オに「禁他見 大正末より昭和に至る」とあり、その作成時期が明確となる。同丁の右下隅には「角朱印・偉風堂」、その上に被せて「虎」の字が押印される。

右上部には刀剣保存協会の印が二種押されるのは『聚藏押形』と同じである。内容の体裁は野線で一点ずつを区画し、一丁に十点が記録され総数二八八点（内古刀一五五^〇点、新刀一三三^〇点）が記載されている。記述内容は刀工名、彫物、折紙、拵、寸法、伝来などについて触れられるなど、前記押形集とは異なる台帳様式となる。内容はよく整理され前半（二丁オから一七丁オ）は古刀、後半（一八丁オから三一丁オ）は新刀で構成され、さらに国ごとに分類されている^{二〇}。そのため本資料は、ある時期に清書し体裁を整えて一冊にしたものと推論される。また野線外の余白に年月日や氏名、そして「ノマレマ」、「チエレマ」などの符牒と思われる文字が記述されている。これについて

は、七丁オの上部枠外に「昭和二年拾一月／石黒氏へ売却／五百式拾五円」とあるなど、売却に関わる情報と考えられる。上部に記された年月日の下限は昭和九年となっており、その頃まで売却記録として使っていた一冊と考えられる。また作品によっては下部の符牒の横に赤字で数字が記されるなど、『蔵刀控』は出納帳簿で、「他見禁」として厳重に管理していたと思われる。本資料は売買価格など、当時の市場価格を知る貴重な資料となり得るが、符牒の意味を正確に理解できずおらず、本稿での考察は控えるものとする。ただそれを除いても、偉風堂蔵刀の性格を明らかにする上で重要な資料であり掲載数二八八点の内には『聚藏押形』に認められない作品が多くある点は看過できるものではない。

最後の『偉風堂押形』は表紙に「大正十五年より昭和三年末日」とあることから、この期間を通じて採拓した押形集と考えることができ。ただ前書三冊とは性格が明らかに異なり、「黒川氏珍藏」や「赤星家ノ御出品」、「於大阪美術倶楽部一覽」など他の数寄者の蔵刀などを鑑刀し、機会あるごとに集めた雑多な押形集といえる。また、押形だけではなく一部は写真が貼り付けられる。その対象も刀だけではなく、鐔も所載し、珍しいのは長曾祢虎徹の鉄硯の写真までスクラップしている^{二一}。ただ一部には、偉風堂の印が押された蔵刀を確認することができる。それらの作品は『蔵刀控』には認められるが、『聚藏押形』には所載されていない。このことからして『蔵刀控』は昭和三年までの蔵品をまとめた台帳であった可能性が高いと考えられる。しかしながら『偉風堂押形』には所蔵が明確にならない作品が多く、偉風堂旧

蔵品の判断は慎重に行う必要がある。そのため本論では『聚蔵押形』と『蔵刀控』を中心に蔵刀の特徴を考察してゆきたい。

第三章 偉風堂コレクションの性格と特徴について

従来、偉風堂蔵刀については国指定・認定の作品が多く（売却後に指定された作品も含め）、それらを中心にして優れた蔵品を形成していたことが指摘されてきた^{三三}。ただ偉風堂の蔵刀の性格は指定の有無によって判断されるのではなく、蔵刀の全体を把握し理解していただく必要があると考えられる。現実的な問題として、現時点で筆者が偉風堂旧蔵の刀剣を全て実見することは不可能である。その点は、国指定の有無が作品の良否を判断する一要素となるものであり、そこに偉風堂の鑑識眼が反映されたものとして評価せざるを得ないことは事実として存在する。そのため、指定物件を取り上げて論を展開する部分があることは先に断っておく。

まず『聚蔵押形』、『蔵刀控』を合わせて古刀一八六点、新刀一四六六の作品が記録されている。古刀は二〇ヶ国の刀工作品が認められ、その国別の内訳は山城二三点、大和六点、伊勢六点、駿河三点、相模一七点、美濃五点、若狭二点、越前一点、加賀二点、越中七点、越後一点、因幡一点、備前八六点、備中四点、備後二点、安芸一点、筑前一二点、肥後二点、豊後二点、日向一点、不明二点^{三三}になる。中世の刀剣王国と呼称される備前国が圧倒的に多いのは自然なことといえる。次に備前と並び刀剣の主要産地^{三四}であった山城と相模が多く、次に筑前という順になる。

筑前国には南北朝時代に左文字が活躍し、同時代に一門が栄えている。偉風堂蔵刀の代表的作品に、久留米藩有馬家伝来の名物大西左文字がある。この大西左文字は、大正一五年五月一四日に有馬家の売立で競売にかけられ、河瀬が落札している^{三五}。河瀬は、大西左文字の他に左文字の短刀を二点、一門の安吉（伊達家伝来、重要美術品）、吉貞（水戸家伝来）、国弘などを所蔵し、さらには左文字の祖父西蓮、父実阿の作品も蔵刀に加えるなど、左文字系統の作品を好んでいた様子がうかがえる。

山城国の作品については館林藩秋元家伝来の栗田口久国（重要文化財）を筆頭に、郡山藩柳沢家伝来の五条兼永（重要文化財）、同家伝来の来国俊（国宝、現・黒川古文化研究所蔵）、諏訪家伝来の了戒（重要美術品^{三六}）などの作品がある。他にも来派、信国、長谷部派なども蒐集している。柳沢家伝来の来国次は、現存例の少ない太刀の作品であり、蒐集品の選択が他の数奇者とは一味違う垢抜けたものであった、と評されることが頷かれる^{三七}。特に、『聚蔵押形』古刀編、追加の部にある犬山藩主成瀬家から購入した栗田口吉光の脇指（打刀）は極めて珍しいものである。かつて筆者も実見したが、均整のとれた姿に地景を多く交えた優れた鍛錬を示す地鉄、沸が強く変化ある作風を表す刃文など、吉光作中の抜群の出来を示していた。国指定品ならずとも唯一無二の作品を蒐集する点に、河瀬の「眼」がよく表されている。

相模では、朽木家伝来の広光（重要美術品、現・佐野美術館蔵）の作品がある。また「相模国住人秋広／延文二年十一月日」の作品は、

平成五（一九九三）年頃に再出現して同工の最上限年紀作として注目されている^{三八}。河瀬の手を離れた作品は、時代が経った後に改めて世に出現して話題を呼ぶことが多いのも特徴である。偉風堂資料に書かれた文章からは、河瀬の強い研究的視点をうかがい知ることができ。その知識に裏付けられた鑑識眼が、資料性の高い作品を逃すことなく拾い上げ蔵刀に加えていったものと考えられる。

前述の南北朝時代を降らない作品類は、偉風堂蔵刀を構成する重要な位置付けがなされるものであるが、河瀬の興味は室町時代の作品に強く向いている点を指摘しておきたい。相模では、小田原相州の康春や広次、助広などの作品が蔵刀に確認され、なかでも康春は五点蒐集しており、蔵刀選択に拘りがあったように思える。その内の「相州住康春作／不動国行之写／天文廿三年五月日狩野介所持」は珍品で、河瀬も「（朱書）天下「不動国行之写」と絶賛している。現所在を知らないが、再出現すれば話題を呼ぶ一つになるはずである。

室町時代の作品に注目すれば、山城の左衛門尉信国、同国の鞍馬関慶定、大和の金房、伊勢の村正一派、駿河の島田義助、美濃の関物、若狭の冬広、越前の「守弘／嘉吉元年八月吉日」、加賀の藤島友重、安芸の「芸州吉木住人能守作／応永卅五年申二月日」などが蔵品に含まれている。越中国には名物松井江（重要文化財、現・佐野美術館蔵）という名品も含まれているが、数としては宇多派の作品が多く蔵品にあり、「宇多国房／応永十二年八月日」（重要美術品）は貴重な年紀作の一つで、山城国来国光に紛れる高い技量が示された作品として評価の高いものである。誰もが知る有名な作品に紛れて、このような作品を

漏らさず蔵品に入れていたのも偉風堂の好みを示されている。

室町時代の作品を意識的に蒐集したことを顕著に表すのが備前国である。備前では一文字助成（重要文化財、現・秋水美術館蔵）や紀州徳川家伝来の助真（国宝、現・東京国立博物館）、景光（号白山権現、重要文化財）などの名品が蔵品に含まれているものの、鎌倉時代の作品は意外と少ないことに気づく。その中で、生前から偉風堂蔵刀の名を高めていたのが「備前国長船住左衛門尉藤原朝臣則光／於作州鷹取庄黒坂造／鷹取勘解由左衛門尉菅原朝臣泰佐打ス之／長祿参年己卯十二月十三日」（重要文化財）と「備前国住長船与三左衛門尉祐定／為栗山与九郎作之／永正十八年二月吉日^{二九}」（重要文化財）の二点である。これは河瀬自慢の蔵刀であったし、誰もが室町時代後期の備前作品の双肩として認めるものであった。この二点を中心にして蔵品中、備前国刀工作の七割強が室町時代の作品で占められていることは注目しなければならぬ。特に室町時代中期以降の末備前と称される刀工たちの作品を好んだことは、旧蔵品を把握することで詳らかになる。また、先の傑出した末備前もあれば、六寸七分の短刀「靱負郷之住長船勝光舍弟宗光／主難波之十郎兵衛尉」などは、銘文に惚れ「舍弟宗光珍」と評価し蔵品に加えている。これなどは勝光と宗光の関係性を明確にする貴重な資料であり、河瀬の蔵刀が研究的視点に立つて蒐集されていたことが明らかとなる^{三〇}。

次に新刀の性格を把握していきたい。新刀は一四ヶ国の刀工作品が認められ、その国別の内訳は山城三二点、摂津四四点、尾張一点、武蔵三三点、常陸二点、陸奥三点、越前八点、備前二点、備中一点、安

芸一点、長門一点、紀伊二点、肥前一四点、薩摩二点となっている。

作品は摂津、武蔵、山城、肥前の順に多く、この傾向は新刀期における主要産地に関係するもので、慶長から元禄頃までの作品が多くなっている。山城では「埋忠重義作」(現・静嘉堂文庫蔵)や埋忠七左、埋忠吉信、埋忠宗義など埋忠系の珍品を揃えているなど、偉風堂好みといえる。摂津では和泉守国貞(以下、「親国貞」とする)や井上真改、「津田越前守助広」天和元年十二月日(重要美術品)、河内守国助、一竿子忠綱など著名刀工を大系的に蒐集している。また「月山貞勝謹作」大正八年十月吉日為河瀬君」など現代刀工との交流もうかがえる。武蔵では「(葵紋)以南蛮鉄於武州江戸越前康継」本多飛驒守成重所持内(葵紋)(重要美術品)の皆焼出来の作品や「(葵紋)興里彫物同作真鍛作之」八幡大菩薩/天照皇太神宮/春日皇太明神(重要美術品)の鶴亀の彫がある虎徹など、越前康継と長曾祢虎徹が多い傾向にある。

新刀の蔵刀品として山城国堀川一派について注目したい。偉風堂蔵刀には「慶長七年国広十二月十四日(重要文化財)や「藤原国広在京時打之」天正十九年八月日(重要美術品)の堀川国広の作品を中心にして一門^三の広実、国安、大隈掾正弘、越後守国儔、出羽大掾国路の作品が存在する。その数は山城作品中の六割強を占めるもので、同国同時代に活躍した三品派の作品が二点のみで極端に少ないことから、堀川物を意識して蒐集したと考えることができる。なかでも、現在四点のみ確認されている正弘の年紀作の内、「大隈掾藤原正弘」慶長十一年三月吉日(重要文化財、現・東京国立博物館蔵)、「大隈掾藤原正弘」慶長十一年三月吉日」の二点を蒐集していた。また、同様に在五点の

み存在が確認されている広実の作品も蒐集品に加えているなど、偉風堂蔵刀形成の緻密性がうかがえる。

そして偉風堂蔵刀の全体的な特徴として彫物が施されている作品が多いことが指摘できる。古刀の大多数を占める末備前については、簡素な樋を含めれば殆どの作品に彫物がある。これは元々末備前に彫が多いというだけの問題ではないと考えている。山城の信国、相模の康春などは彫物に関連して刀工が選択されたのではないかと思われるし、越後の安信など作品が少ない上に「表・寒山拾得、裏・二筋樋」の特異な彫があることで、蒐集の対象に含まれたのではないかと考えられる。新刀期においても、山城で彫物が多い堀川派が選ばれ、彫物が少ない三品派が選ばれなかった理由があるのではないか。摂津では親国貞の作品中三点に俱利伽羅の彫物が施されている。親国貞は、「どんぐり眼」と呼称される独特な俱利伽羅を彫ることで有名であるが、俱利伽羅が彫られた作品を実見する機会は極めて少ない。それを三点も蔵刀に加えたという点においては、強い執着心すら感じるものがある。

この彫物を好んだ事例は、彫物を得意とした長曾祢虎徹にも該当するであろうし、記(喜)内という彫物師が活躍した越前国の刀工や越前出身の康継の作が蔵刀に多い点も同様であろう。そして、紀伊国で活躍した南紀重国の作品、「大和州住人九郎三郎重国居駿河州」後紀伊州明光山作之/羽掃為都筑久太夫氏勝作之/元和八年戊八月吉日(棟に)鑿物天下「池田権助義照」は象徴的な作品といえる。紀州徳川家の抱え鍛冶、南紀重国の作品は世に多く現存するが、一般的には簡素な樋を含めて彫物を施した作例は殆ど存在しないことで知られて

いる。ただ元和七、八（一六二一〜一六二二）年頃に限って数点の彫物が確認されており、本作もその一つに含まれる。銘文にあるように彫物師池田義照が施した彫物は、刀身全体の半分以上におよぶほど大胆に施され、鑢は深く力強く彫り込まれている。これは日本刀史の彫物作品の中でも、圧倒的な存在感と完成度を誇る名品として評価されるものであり、この一点をみても偉風堂蔵刀の個性が示されているといっても過言ではないと考えている。

四章 偉風堂蔵刀品の入手と売却について

河瀬の旧蔵品をみると紀州徳川家、水戸徳川家、加賀藩前田家、郡山藩柳沢家、因幡藩池田家、久留米藩有馬家などの大名伝来品が多く認められる。明治維新以降、大名家が所蔵していた刀剣類は正統時代に入って売立による売却が積極的に行われ始めた。その時代背景もあって偉風堂蔵刀に多くの大名家伝来品が加わっていったと考えられる。たとえば紀州徳川家の売立（昭和八年十一月）に名物松井江が出品され二、三九〇円で落札され、水戸徳川家の売立（大正十年十一月）では西蓮と左吉貞の二点、そして直胤・徳鄰・助政の三本組が出品され、そのまま偉風堂蔵刀に加わっている。これら売立に関しては、河瀬が直接入手することもあれば、札元（刀剣商）を介することも多かったと思われる。

その点、成瀬家伝来品を一括して引き出してきた刀剣商、松谷豊次郎は欠かすことのできない存在である。当時、日本一の刀剣商と謳われた松谷は、河瀬の蒐集品の多くに関与していたとされる。『聚蔵押形』

や『蔵刀控』をみると松谷の名前が頻繁に確認され、河瀬の優れた蔵品形成に重要な役割を担っていたことが分かる。ただ偉風堂資料をみれば松谷の他にも、浜田琴之介や岸本正之助、斎藤栄寛、加島勲などの名前がみえており、関西方面の刀剣商と広く交流し、蒐集を進めていった様子がうかがえる。

そして偉風堂蔵刀を形成した重要な存在が、杉原祥造（刀剣研究者）と土屋可成（愛刀家）の二人と、筆者は考えている。杉原祥造は、戦前に國學院大學で刀剣講座を設けるなど近代刀剣学を推し進めた一人である。杉原旧蔵品は、杉原生存時に直接譲り受けた「備前国住長船次郎九郎祐定作／為浦上与四郎政宗作之／天文十二年二月吉日」もあれば、没後に杉原の親戚加島を通じて入手した作品がある。それらは「津田越前守助広／延宝七年八月日／以地鉄研造之」を除けば全てが古刀となっている。

もう一人の土屋可成は土佐藩士で、戊辰の役では片岡謙吉と共に迅雷隊を率いて戦功を上げた人物である。明治以降は陸軍少将となる傍ら刀剣鑑定の大家となって活躍している^{三〇}。特に新刀を得意として「土屋家の新刀と言へば傑作の代名詞」とされるなど、刀剣商網屋を通じて新刀の名品を数多く蒐集した^{三一}。河瀬と土屋の交流に関することは明らかではないが、土屋旧蔵の多くが河瀬の元に行ったとされる。偉風堂資料では、土屋可成旧蔵品として三二点の作品を確認することができる。ただ、『聚蔵押形』に「土屋可成氏より参ル六十五刀」との記述があることから、さらに倍の数が存在したことになる。先述の南紀重国の彫のある作品も土屋旧蔵品であるなど、他を圧する存在

感を放つ多くの作品を蒐集していた様子がうかがえる。そういう意味において、偉風堂蔵刀における土屋の存在も伝来の中にしっかりと位置付けるべきであると考えている。

そして河瀬は刀剣商、研究者・愛刀家を通じて膨大な蔵刀を形成していたものの、比較的早くから売却に手を出しているのも事実である。大正一五年一〇月十八日（河瀬家^{三四}）に初めて売立を行い、昭和九（一九三四）年三月一二日（第二回目、春陽軒^{三五}）、昭和一〇年五月一三日（第三回目、偉風堂^{三六}）、昭和一一（一九三六）年五月一二日（第四回目、春陽軒^{三七}）に売立を行うなど、計四回にわたる大規模な売却を行なっている。そこには刀剣・刀装具共に多くの出品作があり、各人札会の内容は売立目録を通じて把握することができる。また刀剣研究者、福永酔剣が著書^{三八}で四回分の入札内容を掲載している。ただ、福永の著書では刀剣類だけを抜粋しており、その過程で一部漏れがあるようである^{三九}。また、刀剣博物館の蔵書に『大正拾五年拾月 河瀬家人札目録^{四〇}』の題がつく一冊がある。これには出品番号とは別に、種別ごと（刀剣、蓑入れ・根付・刀装具、その他）の通し番号が振られ、落札金額、落札者（札元）の名が記されるなど主催者側の目録であったと考えられる^{四一}。この資料によれば第一回目は刀剣一〇二件^{四二}、刀装具類（蓑入れなども含む）一五〇件、その他一〇点^{四三}が出品されたことが分かる。

ただ、全ての蔵刀が売立に出されたわけではなく、むしろ優品とされる蔵刀は売立を通じて売却していないように感じられる。売立に出ない作品については、全てではないが『蔵刀控』の罫線外、上部余

白の記述が売却記録と判断される。これをみると昭和四（一九二九）年、石黒（石川県の刀剣商、石黒久呂か）に多くの刀が売却されていることがわかる。このような個人間での売却処分も積極的に行なっていたようである。この個別売却が結果的にはモノの散逸を促し、偉風堂蔵刀の全容が明瞭ならざるものになった要因の一つと捉えることもできる。ただ売却については未だ不明な部分が多く、『売立目録』や『蔵刀控』の情報を精査していく必要があると感じており、今後の課題と位置付けたい。

おわりに

以上、河瀬虎三郎が残した『偉風堂聚蔵押形』（古刀編・新刀編）と『偉風堂蔵刀控』を中心に偉風堂蔵刀の性格と特徴をみてきた。まとめると下記のとおりになる。

・偉風堂資料について、『聚蔵押形』（古刀編・新刀編）は、昭和三年前後から一〇（一九三五）年までに集積した押形が基本となった資料として推論した。また『蔵刀控』は、『偉風堂押形』掲載の押形と重複する内容を備えていることから、『偉風堂押形』作成時期との関係性を考慮し、昭和三年頃までに集めた蔵刀をまとめた台帳で、昭和九年を下限にする出納帳簿であった可能性を指摘した。

・偉風堂蔵刀の特徴として、全体的な構成から末物と呼称される室町時代の作品を集中的に集めていたことを明らかにし、作品としての良さに加えて資料的価値のある研究的視点に立った蒐集を行なっていたことを指摘した。また、古刀・新刀共に彫物を施した作品が多く、そ

ここに河瀬の興味が強く向いていたことを明らかにした。

・偉風堂蔵刀の形成における重要な存在として、従来から指摘されている松谷豊次郎に加えて偉風堂資料にみえる浜田や斎藤、石黒など刀剣商の存在を指摘し、その蔵刀形成に大きな影響を与えた人物として杉原祥造と土屋可成を採り上げた。彼らの蔵刀は偉風堂蔵刀の根幹になるものであり、偉風堂蔵刀の伝来を安定化していく作業の中に、彼らの伝来も確実に記録していく必要性を問うた。

最後に売却について触れたが、今回は売立目録の精査を行っておらず、売買価格だけではなく多数出品された刀装具などを含めた偉風堂蔵品の全体を売立目録を通じて把握していく必要性を感じる。特に、売立目録には偉風堂資料に掲載されない刀剣が多く存在し、それらを把握することで別の特徴が見えてくるものと思っており、今後の課題としたい。

一 押形は、拓本の一種である。乾拓（石華墨・固形墨）で外形となる輪郭を採拓し、刃文を毛筆や鉛筆で描いて模写する記録技法である。

二 現在、河瀬家住宅の表門、主屋、土蔵、土塀などは登録有形文化財（建造物）に指定されている。

三 春陽軒の号は、昭和九年と同一一年の売立で使用した以外は判明しない。また、寸松庵については、河瀬が書き残した数寄書留「竹柏のしづく」に記されている（『無窮亭数寄書留柏のしづく』、再々版・二〇二三年（初版・一九七二年））。

四 現在は、松永コレクションの一部として福岡市博物館に所蔵されている。

五 本間薫山「嗚呼河瀬翁」（『刀剣美術』第一六九号、財団法人日本美術刀剣保存協会、一九七一年、四九頁）。

六 河瀬が作成した『偉風堂聚蔵押形』古刀編、一九丁オに「大正八年杉原祥造氏より譲り受けるもの」との記述があり、また同年には刀剣商岸本正之助の店にも出入りしているなど、大正初年には刀剣収集を進めていた可能性がある（岸本貫之助「河瀬虎三郎氏の逝去を悼む」、前掲載注（五）、五二頁）。

七 国指定は国宝・重要文化財、認定は重要美術品をいう。

八 山本悌二郎（二八七〇—一九三七）は、田中義一内閣、犬養毅内閣で農林大臣を務めた政治家。刀剣の蒐集品は二〇〇点以上あったとされ、代表的な旧蔵品に「短刀／無銘／貞宗（名物徳善院貞宗）」、「短刀／無銘／正宗（名物日向正宗）」などがある。

九 『文化財要覧』昭和三〇年度版（文化財保護委員会、一九五六年）など。

一〇 原稿の執筆後、出版をまたず逝去することになる（『奈良市史』工芸編、吉川弘文館、一九七八年）。

二 刀剣蒐集や研究執筆だけではなく、自邸で鑑定会（勉強会）を開催し（『刀剣工芸』第一七号、刀剣工芸社、一九三六年）、たたら再興の運動に賛同（『日本刀及日本趣味』七月号、中外新論社、一九三六年）や金工作家の墓跡修繕（川口陟『日本刀襍記』（照文閣、一九四三年）など、広く文化の保護に尽力していた）。

三 『叙勲名鑑』昭和四二年春季版、（叙勲名鑑刊行会、一九六七年）。

三 『偉風堂旧蔵刀展』は、昭和四六年三月から六月にかけて、奈良県文化会館と東京代々木の刀剣博物館で開催された。また同年四月一日には

奈良県文化会館で旧蔵品の特別鑑賞会が開催されている（『刀剣美術』第

一七二号、財団法人日本美術刀剣保存協会、一九七一年）。

一四 展観目録は刀剣博物館で開催されたものを参照している。

一五 刀剣博物館は、河瀬が顧問を務めていた財団法人日本美術刀剣保存協会が運営する。

一六 『聚蔵押形』と『蔵刀控』共に、新刀の中に新々刀（安永頃から明治までの作品）と現代刀が含まれている。ただ本稿では河瀬の分類に合わせ「新刀」という言葉の中にそれらを含めて考察する。

一七 『聚蔵押形』新刀編の四五丁オに「昭和二年師走河内栢植氏売立の内」があり、同ウには「昭和三年五月末島津家入札」などと記される。

一八 『聚蔵押形』古刀編の一四丁ウ（朱書）海軍中佐南里勝次氏へ謹呈／昭和十二年海軍大演習教礼式記念として、同二二丁オには（朱書）家珍／時代拵添／昭和十二年春」とある。

一九 内一点は「沈金彫 錫太刀金物鞘沈金彫獅子牡丹」の刀装であり、取り消し線が引かれた行光も加えていない。

二〇 全体的には国別でまとめられているが、どちらも後半部になると刀工が乱雑に入り乱れる特徴をもっている。

二一 「小比木氏（信六郎）蔵、大塩中齋（平八郎）所蔵銘ある蓋あり、大槻磐溪の洛詩あり。川口陟氏より贈られし物也。昭和二年拾一月式十一日誌。

天下一品」と墨書がある。小比木は医学博士で刀剣数寄者の一人、弟の忠七郎は考古学者で同じ刀剣数寄者であった。川口陟は刀剣研究家、南人社を設立して刀剣研究の著書、雑誌を多く出版している。（句読点および括弧内は筆者注）

三三 本間順治『薫山刀話』（東京出版、一九七二年、一四八頁）。

三三 『蔵刀控』の「無銘」のみしかない一点と、『聚蔵押形』古刀追加の部分にある「一無銘陣太刀」は国が判明しない。

三四 中世においては大和国、山城国、備前国、相模国、美濃国が主要な刀剣生産地となり、この五つの国の作風の特徴を評価して「五ヶ伝」という言葉が生み出された。

三五 この時の落札額を五、六〇〇円とする説（千鳥庵主人「名物の九州物（四）『刀剣と歴史』第四九二号、日本刀剣保存会、一九七六年、二八頁）と、二六五〇円とする説（福永、前掲載（一九））がある。福永は、河瀬が昭和

一〇年に売却する時に五、六〇〇円で売却したとしている。年代的に鑑みても後者の方が正しいと思われる。

三六 重要美術品認定では「伝了戒」となっている。河瀬は本作品について「地刃健全同作中随一のものなり」と絶賛している。諏訪家売立時は本阿弥光

忠の折紙が附帯したが関東大震災で焼失したとある。また、戦前の刀剣会の本山であった中央刀剣会の神津伯は、本作を了戒の師匠、来国俊として鑑定して位上げをしている。筆者も、本作を実見したが通常の了戒作より

洗練され来国俊に見紛う垢抜けた印象をもつ作品であった。

三七 本間、（前掲載（二二）、一四七頁）。

三八 「近年出現した同作中もつとも上限の延文二年紀」として資料性が再評価された（田野邊道宏「名刀鑑賞『刀剣美術』、第四五〇号、財団法人日本美術刀剣保存協会、一九九四年）。

三九 栗山与九郎の作は『聚蔵押形』、『蔵刀控』のどちらにも掲載されておらず、入手時期が昭和一〇年より下がる可能性がある。

三〇 「芸州吉木住人能守作／応永卅五年申二月日」も「珍品也」と作品の希少性を評価している。

三一 越前国で活躍した山城守国清と大阪に移住した堀川末弟の初代和泉守国貞と初代河内守国助は数に加えていない。

三二 『土佐史談』第三拾号、(土佐史談会、一九三〇年、一二二頁)。

三三 『日本刀講座』別巻の二(雄山閣、一九三五年、三〇四頁)。

三四 「静岡県丸尾氏大阪河瀬氏所蔵品入札」の名称で売立目録が出ている。

三五 福永酔剣は昭和九年三月一二日に「河瀬・黒川両家蔵品入札」が行われたとしているが、同日には「某侯爵家春陽軒所蔵品入札」が行われている。出品作も両者に相違がなく、何かの誤植であろうか。

三六 「大連原田家偉風堂所蔵品入札」の名で売立目録が出ている。

三七 「春陽軒並某家所蔵品入札」の名で売立目録が出ている。

三八 福永酔剣『大名家・著名家刀剣目録』(雄山閣、二〇〇〇年)。

三九 第一回目の入札会では、出品番号二〇三「白鞘短刀 平安城長吉鋸彫」、同番号二〇四「白鞘短刀 備前忠光 延徳年号」が抜けており、参考資料とする場合に精査が必要である。

四〇 この資料は残念ながら部分的に落丁がある。河瀬虎三郎が寄贈した資料との関連性は明らかではない。ただ偉風堂資料が統一した帙に納まり収蔵されているのに対して、大正一五年の入札目録だけは帙はなく整理番号も飛ぶなど、その他資料と別系統で収蔵された可能性が考えられる。

四一 出品・通し番号のない「白鞘短刀 鞍馬重次 貞治二年号」は「包真ト二本 組合」と記され、出品番号四六五(通し番号九三)の「白鞘短刀 大和国包真」と二本組の出品に変更となっている。同様に出品時の変更

と思われる記述が他五点確認されるなど、主催する組合側の帳簿であったものか。

四二 二点組での出品もあるが、それらは一件として数えている。

四三 その他に分類される出品作品には「長常 馬 紙本」や「篤興 四君子彫 鉄瓶」などがある。

